市民談話室

原稿募集

3月1日号の原稿を募集します。皆さんが日ごろ考えていることや身近な出来事など、気軽に投稿してください。字数は400字から600字程度とします。あて先は、〒950-12 白根市大字白根1235　白根市役所　企画調整課　広報広聴係（☎373-2111㈹333）です。

孫娘と楽しく過ごす毎日

篭島　ハツさん（上鷲ノ木・農業・56歳）

この冬は例年よりも雪が多くなるような気がします。十一月の末でしたが、突然雪が降り出してびっくりさせられました。

私は孫の子守をして二年目を迎えて楽しく過ごしております。二歳と一歳の孫です。二歳の子供が、朝起きてきて「おはよう」とあいさつする、にこやかな顔を見ると、本当にうれしいやらかわいいやらで、一日が楽しくなります。支度をさせてご飯を食べさせ、食べ終わるころになると、そっと動き出します。

子供は大人のすることを見ていて、まねをします。悪いことであれば教えるようにしながら厳しくしかります。でも「ばーばちゃん」と言って私のところへ寄ってきます。

テレビで「おかあさんといっしょ」が始まると、私に「相手になって」と言ってきます。私も孫の言うとおりに、歌を歌ったり体操をしたりして楽しんでいるところです。番組が終わると靴をはいて外へ飛び出します。お天気が良ければ散歩をしたり、村にあるお地蔵様へ、健康に、交通安全にと、お参りに連れていきます。子供が私と一緒に手を合わせている姿を眺めていると、かわいくてなりません。このまま健康で、交通事故に遭わないように、また手を合わせる私です。

老人と社会　看護しながら思うこと

小池　孝子さん（中大郷・看護助手・21歳）

私は現在看護助手として仕事をしています。老人の世話が主ですが、その中でいろいろと考えさせられることがあります。

病院には身体のまひや痴ほうで家族と一緒に生活できない人がたくさん入院してきます。痴ほうというと、よく「ボケている」と馬鹿にしたり、笑ったりする人たちもいますが、それは決してしてはならないと思います。年を取らない人はだれもいません。私たちも、いずれはたどり着く道で、若い人たちから世話をしてもらわなければならなくなるかもしれません。

お年寄りの顔や手のしわには、今まで過ごしてきた人生の物語が詰まっています。その物語を時には聞いてあげることも大切だと思います。

これから老人の割合がどんどん増え、高齢化社会が進んでいく中で、さまざまな問題が出てきています。私たちはそれに備えてもっともっと考えていかなければならないと感じています。

市民文芸

俳句

晩秋の遠くへ沈む夕日かな　堀内ナナ子
秋水をこぼる平たき石抛る　成沢　素明
悉く枯れ悉く柿赤し　安沢　飛浪
干大根漬けごろ曲り加減よし　小林　すみ
使ひよき小鍋焦がして日短か　樋口　トシ
川越して来る大火事の火の粉守る　五十嵐寛吾
（以上大風会）
木枯に引き裂かれたる広告旗　小林　なお
枯蓮の音符のごとく風走る　間島きよ子
禅寺の豆腐手作り冬用意　真島きぎえ
鉄橋の上ゆく夜汽車冬の雷　小林富沙子
池に桶浮かせて峡の冬支度　金子　千代
木守柿ついばむ鳥のゆれどうし　塚本　静子
（以上かまつか新飯田俳句会）

短歌

寒入て庭のさざんか咲きそめし
雪降る晴間に陽浴び美しく　長谷川久二
いさみたち白寿大学に行き妻
講話も時代と頬を紅らめ　小出熊四郎
喜寿のためつたなき歌を綴りしも
歌集にせぬやと子供等は言ふ　小出よしの
息子の臥せる寒の一夜を居眠やら
ず　客間に立てば梅の香の満つ　中村　京

川柳

他人の手は借りずに生きる寡婦の意地　佐藤　ヨキ
税金がゴミにもかかる行楽地　田中　成子
週休二日地球も休みたい自転　高橋祐四雄
藁一本摑んで生きる余命の灯　田村　恒夫
セクハラを期待しミニの足を組み　竹石　甚五
来年は御所に立てたい鯉幟　中村　尚治
ヘソクリの力を借りにくる家計　早川　英男
ときめきは心の襞にたたみ込み　西条　ムラ
春一番受験疲れを吹き飛ばす　山岡　フミ
嫁がせて父は虚しい酒を呑む　吉川　彰
参拝客に愛想笑いをしてる神　米野　光雄
心根のやさしい悪人面もいる　今井　七郎
森枯れてふと鵯の吐息聴く　織田　福治
プライドが崩れて女蛇行する　織田　セツ
現代っ子軍歌の意味が判らない　後藤マサノ
陰膳の足からもれるお念仏　佐藤トミノ
居候の下駄もはしゃぐ三ガ日　大井　義雄

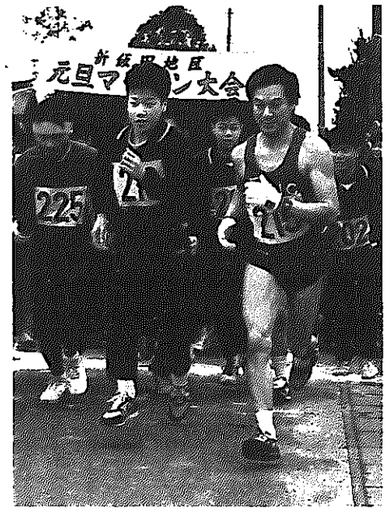
国道8号誘致の思い出　躍進白根の象徴を大切に

渋川善太郎さん（下大郷・会社役員・80歳）

国道8号は去る昭和三十八年、新潟国体と同時に開通した。

白根郷一町八カ村が合併したばかりの昭和三十年、当時の議員数は特例で六十人だった。合併前に各村の村長、助役の職にあった人は、ほとんど新白根町の議員となり、発言の内容も負けず劣らずのお山の大将ぞろいであった。

そのころからポツポツ白根にも国道を誘致したいという声が、だれが言うともなく話題となった。話は次第に高まり、ぜひとも国道を白根町に誘致したいという賛成意見と、田園都市白根の農地をつぶすことにはあくまでも反対であるという意見で議会は二つに分かれた。しかし、誘致するにはそれなりの手続きもある。意思表示が急務となり、議会の議決が必要に迫られた。私は市の将来のためには、やむを得ず農地がつぶれても誘致するべきであるという、推進の意志を持っていた。いよいよ誘致か否かを決する国道誘致に関する議案が上程された。賛成討論、反対討論が続き、採決の結果、ようやく賛成多数で議決を見た。



今、当時のことを思い起こすとき、議会の楽屋裏の様子や、議員同士の醜い争いの姿が走馬灯のように目の前にちらついてくる。以来、三十年余りが過ぎようとしている。昔華やかだった表通りは最近は人影も薄く、夕暮れには早々と店頭の明かりが消えている。

一方国道8号は年ごとに開発が進み、企業も進出。公共の建物をはじめいろいろな職種の店が立ち並んで、夜遅くまでともるネオンの明かりは、躍進する白根市を象徴するように夜空を染めている。このような光景を見るたびに、白根に国道8号がなかったら、今の発展はあり得なかったであろうと思う。

国道8号の延長は約二十キロ、面積は七百町歩といわれている。国道の用地は農民が守り通した先祖伝来の尊い宝であった。今、その姿を変えてはいるが、白根市の躍進を約束する土地である。もちろん国道は国有地であるが、土地の提供者は白根市民である。国道は白根市の宝である。先人が築いたこの国道8号を、市民挙げて守り続けたいと思う。

ビジョンが見えない白根市　新市長に期待

吉川千恵子さん（五六の町・主婦・55歳）

バブルの崩壊で、かつてない不況の九十二年が去り、日本にとっても白根市にとっても避けて通れない農業問題が待ち構えた九十三年がやってきた。このような環境の中で行われる白根市長選挙で見せてもらいたいのが、白根市の将来をどのような方向へ引っ張っていこうとするのかというビジョンである。県都新潟市と県央三条市に挟まれた地域の白根市が特性を生かすためには、どのような道を進んだら埋没せずに活路を見いだせるのか示してもらいたい。

農業においても商業においても、ただ反対するだけで、外からの資本や人を拒絶し続けては、白根の発展は望めない。これは歴史が証明するところであると思う。これからの白根市はよそ者を嫌わず、ともに共存共栄ができるよう知恵を働かせ、努力をしなければ発展はあり得ないと思う。

新しい市長になられた方には、早く白根市のビジョンを明確にし、市民の前に披露され、白根市の発展に努力されることを切に希望する。